

学部専門科目「環境英語」に対する期待と課題：
履修検討学生向けアンケートの分析
Expectations and Challenges of Environmental English: Analysis of
Questionnaire for Prospective Students

太田絵里*，櫻井千佳子*，吉村スーザン*，岡野恵**

Eri OTA*，Chikako SAKURAI*，Susan YOSHIMURA*，Megumi OKANO**

*武蔵野大学環境学部，**大正大学表現学部

[要約] 本研究では，学部専門科目である「環境英語」の履修を検討している学生に対し，専門科目の履修における英語力の必要性に対する認識，英語の学習方法の現状，「環境英語」という教科に対する関心および期待，本科目の活用方法等に関するアンケートを実施し，その結果を分析することにより，英語を活用した環境分野の学習の向上を目的とする専門教育かつ環境に関わる専門分野の理解を高めるための一環としての英語教育の双方を合わせた本科目の課題を把握した。アンケートの結果，履修検討者の多くは，環境問題を世界的な問題として捉え，世界の公用語である英語を活用し問題を理解した上で専門知識を活用するという希望，またそのための英語力の必要性に関する認識は高いが，英語力また学習の向上のための努力が講義に関連したものに限定されていた。このことから，履修検討者の本科目に対する希望と実際の学習方法に対して大きなギャップが存在することが分かった。

[キーワード] 環境英語，専門教育，英語教育，グローバル人材，環境リーダー

1. はじめに

現在高等教育機関では，国内外の様々な分野でグローバルに活躍できる人材の育成が求められている。グローバルに活躍できる人材とは，情報通信・交通手段等の格段の技術革新により，社会経済活動における「ヒト」，「カネ」，「モノ」，「情報」が国境や地域に限定されることなく自由な移動が可能となるグローバル化の潮流の中で活動する人材である。また，グローバル化に伴い，金融や物流の市場だけでなく，地球温暖化や生物多様性の減少，大気や水質の越境汚染，廃棄物の越境移動等，環境問題も多様化，地球規模化する中で，環境に関する諸課題に取り組む人材についても，国際的な素養が求められるようになった。これは，環境リーダー育成推進事業，グローバル人材育成推進事業等，近年日本政府が高等教育機関を対象とした人材育成に関連した政策を強化しているこ

とからも窺える。具体的に，環境リーダー育成に関連した政策に関しては，2007年に閣議決定された21世紀環境立国戦略で，「大学，産業界等との協力の下で環境技術，政策等を学び，行動する企業人や，幅広い関係者をつなげて持続可能な地域づくりを進めるコーディネーター等，国内外で活躍できる環境リーダーを育成する」と記されている¹。また，内閣官房長官を議長として組織されているグローバル人材育成推進会議によれば，グローバル人材には，「語学力・コミュニケーション能力，主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感，異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を含む要素が必要とされると示されている。加えて，今後国内外で活躍する人材に共通して求められる資質として，「幅広い教養と深い専門性，課題発見・解決能力，チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダー

シップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等」が挙げられているⁱⁱ。これらの政策実行において具体化されている人材像からは、主体性や積極性、コーディネーション能力等の様々な素養と共に、異文化および自国への理解、専門性と幅広い素養、語学力が求められていることが理解できる。

これらの政治的社会的背景に対応すべく、武蔵野大学環境学部では平成 22 年度より専門科目として環境英語科目を設置している。武蔵野大学における環境英語科目は、平成 22 年度に設置された「環境英語入門 1, 2」(1 年生対象必修科目)、「環境英語 1, 2」(2 年生対象選択科目)、平成 23 年度に設置された「環境英語 3, 4」(3, 4 年生対象選択科目)の 3 つの通年科目で構成される。本稿では、これらの科目のうち選択必修科目である「環境英語 1, 2, 3, 4」を「環境英語」として呼称し必修科目である「環境英語入門」と区別する。

これらの環境英語科目は新しく設置された科目であるため、これらの科目における確立した教育内容や教育方法などは存在せず、英語教育、環境学、環境教育を専門とする教員らがその内容や教育手法を検討している。それゆえにこれらの科目では教育目標と履修生の学習効果等について、語学力向上と専門的な知識の教授の配分、教材と履修者の理解度の齟齬等の課題を有している。

2. 研究目的及び方法

そこで本研究では、選択必修科目である「環境英語」の履修を検討している学生に対し、専門科目の履修における英語力の必要性に対する認識、英語の学習方法の現状、「環境英語」という教科に対する関心および期待、本科目の活用方法等に関するアンケートを実施した。本研究の目的は、上記のアンケート結果を分析し、英語を活用した環境分野の学習の向上を目的とする専門教育かつ環境に関わる専門分野の理解を高めるための一環としての英語

表 1 : アンケート質問内容

1. おおよその英語レベルを教えてください。
2. 現在興味のある環境問題は何ですか。
3. 環境問題を学ぶ上で英語は必要だと思いますか。
4. 現在英語をどのように勉強していますか。
5. 「環境英語入門」履修にあたり、困難に直面したことはありましたか。その際、どのようにその問題を克服しましたか。
6. 「環境英語入門」を履修して関連専門科目である「環境英語」に興味をもちましたか。
7. 「環境英語」という科目に興味を持った理由は何ですか。
8. 「環境英語」という科目に期待する学習効果は何ですか。
9. 「環境英語」という科目の履修は大学在学中にどのような利点があると考えますか。
10. 将来、環境問題を英語で理解し、コミュニケーションを図れるようになった場合、将来それをどのように活用したいと思いますか。

教育の双方を合わせた本科目の課題を把握することである。これにより、学生の能力開発における本科目の活用方法、また本科目の目的と学生の学習効果に関する具体的な課題等に対する理解が深まり、今後の英語を活用した専門科目のあり方に関しての示唆を与えることができると思われる。

本稿では、現在開講されている専門科目である環境英語科目の概要についてクラス構成を含めて解説した上で(3)、アンケート結果を分析する(4)。その後、分析結果をもとに「環境英語」の教育内容や教育手法のあり方を考察する(5)。

アンケートは、次の通り実施された。配布対象は、必修科目である「環境英語入門」を履修し、今後選択必修科目である「環境英語」の履修を検討している学部 1 年生の学生 59 名である。アンケートでは、学生の英語レベ

ルに関する設問として、語学能力検定の結果を把握し、環境問題の興味対象を問うた。その後、環境問題を理解する上での英語の必要性、英語の学習方法、「環境英語」という科目に期待する効果および活用方法に関しての設問を設定した(表1)。質問4,7,8,9は複数回答とした。アンケートの回答時間は15分とした。

3. 環境英語科目の概要

「環境英語入門 1,2」は英語習熟度によって4つのクラスに分類されている。「環境英語1,2」はレベルをベーシックとアドバンスの2つのクラスに分けており、英語習熟度および履修者の興味により、英語力の強化を希望する場合はベーシック、環境問題の理解の深化を希望する場合はアドバンスのクラス履修を推進している。「環境英語,3,4」は1クラスとなっており、大学院進学や留学を希望している学生を対象とした科目である。

「環境英語入門 1,2」の目的は、「環境分野に関する専門的文献等の英語に身近に触れることによって、環境学をグローバルな視点から専門的に学び、代表的な環境トピックを英語で理解できるようになること。」でありⁱⁱⁱ、2年生以降の環境英語科目の前段階となるものとして位置付けられている。

「環境英語 1,2」の目的は、教科シラバスに「環境問題の全体像と相互関連性を英語で理解することにより、環境問題に関連した学びの広がりを実現とする。環境に関連する諸問題について英語で学び、英語で話し合うことにより、環境問題に関する知識や視野を広め、英語の情報収集能力及びコミュニケーションスキルを深める。」と示されている^{iv}。

同様に、「環境英語,3,4」の目的は、「環境・開発分野に関する専門的文献等の英語に身近に触れることによって、環境に関わる話題について国際的な観点から議論できるようになること。」と記されている^v。

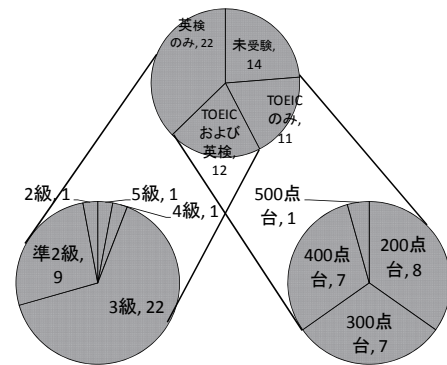


図1: 履修検討者の英語レベル

4. アンケート結果

4-1. 英語レベル

履修検討者の英語レベルに関するアンケート結果は、次の通りである。語学能力検定試験未受験者が14名、英検およびTOEICの双方を受験者が12名、TOEICのみの受験者が11名、英検のみの受験者が22名である。その内訳は、次の通りである。英検5級が1名、英検4級が1名、英検3級が22名、英検準2級が9名、英検2級が1名、TOEICスコア200点台が8名、300点台が7名、400点台が7名、500点台が1名である(図1)。

4-2. 環境問題の関心

履修検討者の関心の高い環境問題は、地球温暖化(14名)、生物多様性(14名)、エネルギー問題(9名)、水資源問題(9名)であった。その他大気汚染問題、海洋汚染、リサイクル問題等が挙げられた。

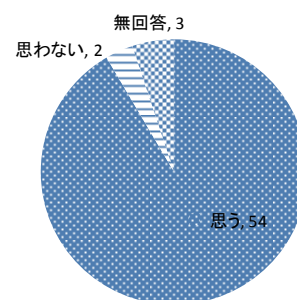


図2: 質問「環境問題を学ぶ上で英語は必要だと思いますか」に対する回答

4-3. 環境問題学習のための英語の必要性に関する認識

環境問題学習のための英語の必要性についての認識の結果は次の通りである。9割以上が英語の必要性について認識している(図2)。その理由として33名と約半数が「環境問題は国際的な問題であるため、世界共通言語である英語が必要」、「国際的な視野を広げる上で重要」という環境問題の国際化に伴う語学の必要性を挙げた。次に「環境関連の資料の多くが英語である」、「英語の方が情報量が多い」等、広範囲の情報収集を希望する学生が17名と約2割を占めた。また、世界共通語である英語の必要性を挙げた学生が4名であった。必要ないという回答では、「単語のみしか使用しない」「情報は学内のデータベースで十分であり、国内の問題に目を向けなければならない」という意見が挙げられた。

4-4. 英語の学習方法

英語の学習方法に関しては、9割弱が講義の履修と回答しており、講義の履修および予習復習は約3割が行っていた。英会話学校や英語教材の利用等、講義以外の学習を行っている学生は2割以下であった(図3)。

4-5. 講義の課題に関する克服方法

「環境英語入門」を履修し、困難に直面したか、また、その際の克服の方法は、という問いに対しては、6名が単語を調べるために

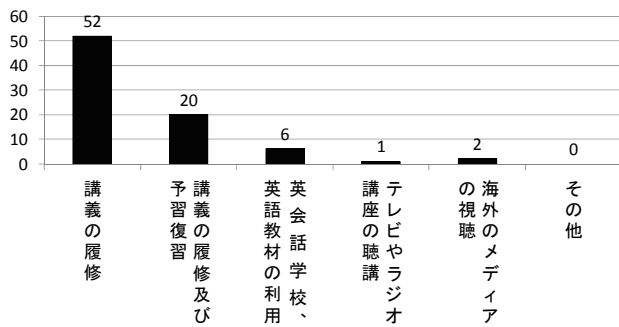


図3: 質問「現在英語をどのように勉強していますか」に対する回答

辞書を多く使ったと述べている。また、3名が文法に対して困難を感じ、3名が和訳が困難だったと述べている。また、5名がリスニングを繰り返したと述べている。1名は、何もしなかったと述べている。回答者の約半数である35名は無回答、または特になし、とのことであった。

4-6. 専門科目である「環境英語」への関心

「環境英語」の履修に関しては、8割以上が興味を示した(図4)。興味を持たない理由として、6名が「英語が苦手であるため」と述べている。「環境英語」という科目に興味を持った理由としては、回答者の役半数が「環境問題を理解する上で英語のスキルがあったほうがよい」、4割がそれぞれ「国際的な環境問題の理解」、「英語のさらなる上達」と回答している。また、1割強が「他国の人々とのコミュニケーション」を求めている(図5)。

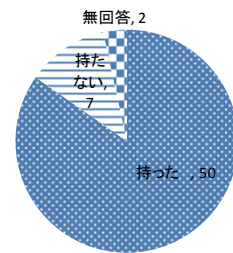


図4: 質問「「環境英語入門」を履修して関連専門科目である「環境英語」に興味をもちましたか」に対する回答

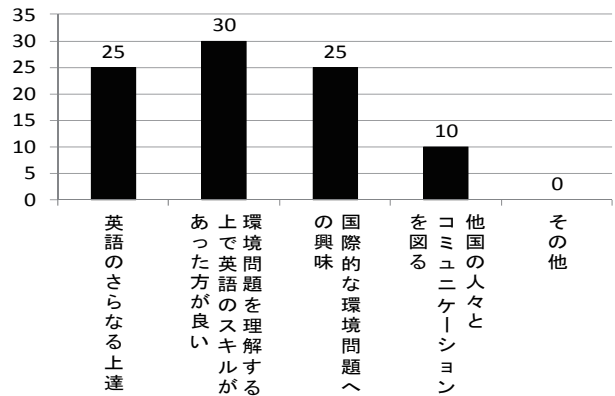


図5: 質問「「環境英語」という科目に興味を持った理由は何ですか」に対する回答

4-7. 「環境英語」という科目に期待する効果

「環境英語」という科目に期待する効果に関しては、「環境分野に関する海外の英語で入手、理解」が全体の半分以上を占めており、続いて半分以上が「英語のさらなる上達」を求めている。「環境問題に対する自らの意見を英語で発言、執筆」、「環境問題に関連した発表を英語で行う」は、それぞれ2割、1割が希望している(図6)。

4-8. 学部における「環境英語」という科目の活用方法

学部における「環境英語」という科目の活用方法に関しては、「専門科目の履修の一環」と回答した学生が全体の8割以上を占め、「就職活動の際のアピール」が1割強、「大学院進学」および「留学準備」がそれぞれ1割弱であった(図7)。

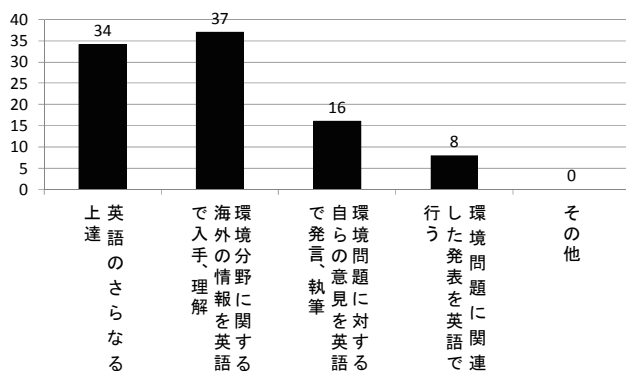


図6: 質問「「環境英語」という科目に期待する学習効果は何ですか」に対する回答

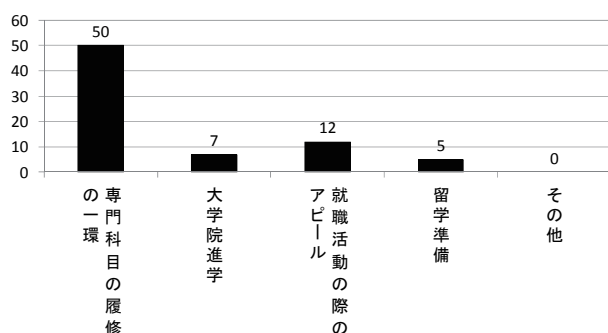


図7: 質問「環境英語」という科目の履修は大学在学中にどのような利点があると考えますか」に対する回答

4-9. 効果習得後の活用方法

環境問題を英語で理解し、活用するようになるという「環境英語」の科目の目的が達成された際には、「外国人の視点からの環境についての考察を得たい時に利用したい」、「環境分野を学ぶ他国の人々と話し合いたい」、といった他国の人々の意見交換を求めている学生が25名存在した。次に、「海外で起きている問題について自身で調べる」、「日本で流れている情報をうのみにしなくてもいいようになりたい」といった海外の情報の収集を10名が希望していた。また、「海外の人にも日本の環境問題について知ってほしい」、「自分の意見を英語でも伝えられるようになりたい」といった自らの意見や日本の情報の発信を4名が求めていた。その他の希望として、「環境NGOへの就職」、「海外の現地視察」、「国際的な現場での活躍」が挙げられた。

4-10. まとめ

アンケート結果から専門科目の履修における英語力の必要性に対する認識、英語の学習方法の現状、「環境英語」という教科に対する関心および期待、本科目の活用方法について、次のようにまとめる。

第一に、履修検討者の興味の対象は、地球温暖化、生物多様性、エネルギー問題、水資源問題グローバルな環境問題に関心が高いことがわかる。

第二に、世界的な課題である環境問題を理解する上で英語が必要であるという点については高い認識がある。

第三に、英語の学習は講義に関連したものに限定されている。また、多くの学生がTOEICの点数が300点台またはそれ以下であり、英検も準2級以下であることから、専門科目の理解に求められるだけの英語力を達成するには相当の努力を強いられるが、現段階では学生自身が授業外で英語能力を強化するような自発的な取組を特段行っていない。

第四に、「環境英語」という科目の履修においては、英語力の向上そのものよりも英語を使って専門知識を増やし、情報を収集し、それらを活用したいという希望が多くある。

第五に、「環境英語」の履修目的は、専門科目の履修の一環という答えが多く、その後さらなる活用としての大学院進学、留学等に対する希望者も存在する。

第六に、「環境英語」という科目の活用方法として、情報収集、英語力の向上、自らの意見の発信を求めており、将来的には、コミュニケーション、現場視察等の国際性を視野に入れた活動の実効を希望している。

以上のことから、環境問題を世界的な問題として捉え、世界の公用語である英語により問題を理解した上で専門知識を活用するという希望、またそのための英語力の必要性に関する認識は高いが、学生の英語力また学習の向上のための努力は講義に関連したものに限定されており、履修者の本科目に対する希望と実際の学習方法に対して大きなギャップが存在することが分かった。このことは、英語を活用して環境分野の学習を発展させたいという意欲は高いが、具体的な学習の目的および手段が定まっておらず、主体的、自律的な学習ができていないことを示唆している。

5. 考察

「環境英語」の目的である環境問題の英語での理解、コミュニケーションには、環境問題のコンテンツそのものの理解と共に、語学力、プレゼンテーション能力、説明能力など様々なスキルが求められる。一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会によれば、履修検討者の内 TOEIC 受験経験者の多くが当てはまる TOEIC220 点～470 点のスコアはレベル D であり「通常会話で最低限のコミュニケーションができる」、「身近な話題であれば応答も可能」と説明されている^{vi}。今回アンケートを行った学生の英語レベルは高いとは言え

ず、英語に対して苦手意識を持つ学生も多い。しかしながら、そのような状況で、「環境問題における英語の重要性を理解し、情報収集・発信を行う」という意欲が健全に育っているという点は評価でき、「環境英語」履修の準備段階で履修が義務づけられている「環境英語入門」の効果であると考えられる。一方で、語学としての英語が学習過程にある学生に対し、同時に専門的な内容を講義するという試みは、英語教育、環境学のそれぞれの目的を十分に達成することができるか、また、それぞれの方法論をいかに活用すべきか、という課題が存在する。回答者の中には、「英語が苦手」である学生が存在しているため、語学力向上のためのサポートも重要であり、英語教育からの知見も必要とされる。

環境問題という専門分野を英語で理解するためには、講義への参加や予習、復習だけでは不十分であり、講義の内容をきっかけとして授業外で学生各個人がさらなる学習を発展させるための自己の努力が必要不可欠である。今後は、予習、復習を徹底させた上で、学習成果を目に見える形で学生に提示し、さらなる学習努力の向上として、学生に対する動機づけ、課題を通じて講義外の学習に触れる機会を与える、学生の興味が高かった環境問題のテーマを中心に多角的な情報源を提供する等の広がりを持たせることが重要である。本点において、外国語としての英語 (English as a foreign language: EFL) と環境教育を統合させた試みが有効であると考えられる。

ⁱ 21世紀環境立国戦略特別部会 (2008) 21世紀環境立国戦略, www.env.go.jp/guide/info/21c_ens/21c_strategy_070601.pdf 23pp. (2012年1月12日閲覧)

ⁱⁱ グローバル人材育成推進会議 (2012)

www.kantei.go.jp/jp/singi/global/120601matome.pdf. 8pp. (2012年1月12日閲覧)

ⁱⁱⁱ 学校法人武蔵野大学 <http://1c.musashino-u.ac.jp/> (2012年1月12日閲覧)

^{iv} 学校法人武蔵野大学 (2012年1月12日閲覧)

^v 学校法人武蔵野大学 (2012年1月12日閲覧)

^{vi} 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会

www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/proficiency.pdf (2012年1月12日閲覧)